

JICA・AFICAT
事業で情報交換会

コートジボワール農機事情 国あげて機械化支援

JICA（独立行政法人国際協力機構）は昨年12月17日、都内千代田区のJICA本部会議室及びオンラインにて、AFICAT（日・アフリカ農業イノベーションセンターレ第1回情報交換会

している。同情報交換会では重点対象国のコートジボワールと、同じ仏語圏西アフリカのセネガルについて、農業セクターの現状や農業技術シーズ等が紹介された。

では2018年における米生産量が200・7万トンとサブサハラアフリカ内6位であるが、気候に左右される不安定な栽培状況となっている。

チームよりコートジボワールにおけるAFICAの活動内容が紹介され、その後、デロイトトーマツファイナンシャルアドバイザリーを代表者とする調査チームによる「コートジボワールの主要農畜産物サプライチェーンの概要」、JICA国際協

水田面積が3万haと5%に満たず、残りの半分が②天水低湿地、もう半分が③陸稻であるため。同国の農業機械化はこの3種類の栽培体系や機械技術、所有・利用体系に分けて考える必要があるとし、①灌漑水田は日本に近い機械化体系が可能で

タンザニア・コートジボワール・ナイジェリア・ガーナ・ケニアの重点対象5カ国にて順次稼働し、昨年2月より新フェーズとして引き続き活動

力専門員・大石常夫氏による「コートジボワールの農業機械化の現状」、嶺三祐コンサルタンツ・江口岳人氏による「セネガルの農業セクター、農業機械化の現状」——の3講演などが行われた。

そのうち大石氏による
と、アフリカにおける米
は、生産量こそ世界全体
の約5%と少ないもの
の、非常に重要な食料で
あり、アフリカ地域内の
消費量の5割以上を域外
からの輸入に頼っている
状況。コートジボワール

は機械化が難しいが、雨季が終わると水位が下がってコンバインが活用できるなどとした。③陸稻は畑作の機械化体系で対応できるという。